

大地に刻まれた西会津の足跡 地形からみた西会津の歴史 その6

—軽沢間宿—

文：田崎 敬修

甲石^{かぶといし}を過ぎ不動川^{きりいしがわ}沿いに進むと左手山地から切石川^{わかれちやや}が合流します。この合流点（別茶屋）で不動川沿いに柳津方面に行く道と切石川沿いに軽沢方面に行く道とに分かれます。その3「下野尻宿」で登場した安座の二瓶七左衛門は越後境からお城改修用資材を若松に運ぶためここまで来たのですが、彼が選んだのは軽沢—東松峠—片門—鐘撞堂峠—坂下のルートでした。

年代は不詳ですが、軽沢の北約 550 ㍍付近の山腹に近藤美濃某という者が住んでいたそうで、軽沢は昔から阿賀川沿いの漆窪^{ほしくぼ}方面（高郷）と只見川沿いの片門方面に出る道筋の分岐点に位置していた村だったと思われます。鎌倉幕府執権の北条時頼^{ほうじようときより}作といわれる東松峠の和歌があることなどからも、昔から東松峠ルートはよく知られていたルートだったのかもしれませんが。本道と裏街道に区別されるのは江戸時代になってからのことで、古い道筋は本道・裏街道の区別なくいくつもそれぞれにあったようです。



▲ 国土地理院発行 1/2.5万地形図「柳津」拡大・着色

切石川のV字谷沿いに進んでみましょう。1km 程進むと谷が開け軽沢集落に到着です。軽沢は急病などの特別な場合を除いては宿泊できない宿場で、正式な宿場間にある宿場という意味で「間宿」と呼ばれていました。とは言っても宿場ですから、その形式は踏んでいました。切石川の右岸に沿って街道が通り、川と街道を挟んで両側に家々が並び、切石川は用水路の役目をしています。切石川の段丘面が狭いので奥行きが十分に取れず、家は街道に対して横長に建っています。正式な宿場のような明確なクラックはありませんが、山間地の狭い平地の場所ですから見通しは元々よくありません。

軽沢の人々は荷物の運搬で生計を立てていました。本街道を使って塩や魚などの商品荷を津川から直通で運んでいましたが、各駅所からそれはおかしいと藩に訴えられました。1691 年（元禄 4 年）に藩の許可を得ていると反論したのですが、藩の裁定は野沢—坂下間のみ背負荷で運ぶことに限るとされ、大変な減収だったと思います。

切石川はV字谷で河岸段丘ができなかったため、軽沢までの道は切石川の中を歩いていました。冬になると雪崩に悩まされ大変困っていたのですが、江戸時代中頃、切石川の右岸に藩と篤志家（丹藤家）によって新道が開削され、安全に通行できるようになりました。



「あゝ、今日もお腹いっぱい」です。（三留）
そんな私の最近の口癖は「源にしたいと思います。」
朝晩はすっかり涼しくなり、町のあちろちろで秋の気配を感じています。秋といえば、食欲の秋。食べすぎには注意、と思いつつも、旬の美味しいものは美味しくていただき、元気の源にしたいと思います。



編集後記

今月は、9月5日に行われた生涯学習発表会から。出演者の皆さんは、色とりどりの華やかな衣装に身を包み、生き生きとした表情で唄や踊りを披露していました。楽しみながら学び、練習を重ねてきた皆さんの姿から、元気と感動を分けていただきました。

今月の表紙